

2025 年 8 月 24 日 説教「無くてならぬもの」

ルカの福音書 10 章 38～42 節

前段でイエスは、律法の専門家が「永遠のいのちを得るには何をしたら良いのですか」という質問から発し、あの良きサマリヤ人のたとえをされました。誤解されがちなたとえ話を通して、良きサマリヤ人とはイエスご自身であるということを教えられました。主イエスを見上げてこそ、隣人への愛の道も開かれるのだと導かれました。

1. マルタとマリヤ (38～39 節)

- ①ベタニヤ村に入り (38)「さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。」

イエス・キリストの一行はエルサレムへの旅を続けていました。イエスの一行がある村に入られたとあります。これは明らかにベタニヤです。エルサレムには 3 キロ程の所にありました (ヨハネ 11:18)。オリーブ山の東側のふもとにある村でした。この村にはイエスはよく立ち寄られました。そこには、なじみ深い家族が住んでいました。マルタ、マリヤの家族です。兄弟にラザロがいましたが、彼は病んで命を落としました。イエスによってその回復が与えられたことがヨハネ 11 章には詳細に記されています。さて、イエスが来られたと知ると、マルタはその家に喜んでお迎えしたのでした。

- ②みことばを聞き (39)「彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。」

ここに出て来る妹マリヤはイエスが過越の祭の前にベタニヤに来られた時には、高価なナルドの香油をイエスの足に塗り、彼女の髪の毛でその足を拭ったその人でした (ヨハネ 12:3)。そのマリヤはイエスが来られたと聞き、何より楽しみにしていた、御言葉を聞く態勢をとりました。彼女は、イエスが、家の中に入られると、すぐにイエスの足もとに座りました。もちろん、イエス様からの教えを聞くためでした。主イエスもそれにお応えくださって、お話を始めてくださいました。

2. マルタの苛立ち (40 節)

- ①気が落ち着かず (40)「ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。」

マリヤが御言葉に没頭している間、マルタは久しぶりに来てくださったイエス様にはゆっくりしていただきたいと思っていました。身体を休めて、横にさせていただくことも一つだと思いました。休んでいただく部屋の整えもしました。喉を潤していただくために飲物も持ち運びました。また、できるだけおいしいものを作って食べていただきたいと思っていました。ともかく、もてなしのために色々と考え、行動していました。やることがたくさんあって、猫の手も借りたい状態でした。そんなことで、マリヤにも手伝ってほしいと思い、イエス様のところ来て言ったのです。

- ②マルタの願い (40 b)「『主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするよ

うに、妹におっしゃってください。』」

それは苛立っていたことがよくわかる発言でした。「主よ、私だけがもてなしをしています」。それなのに、マリヤはそれを手伝いもせずに、イエス様の近くで御言葉を聞いています。それではあまりに不公平です。そして、それを「何ともお思にならないのでしょうか」とまで言ってしまったのです。その上で、注文したのです。「私の手伝いをするように、妹におっしゃってください」。忙しいので、助け手が必要なのです。マリヤに手伝うように言ってやってください、というわけです。

3. マルタへの教え (41～42 節)

①主イエスの答え (41)「主は答えて言われた。『マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。』」

そうすると、主イエスは答えられたのです。『マルタ、マルタ』と二回声をかけられています。普通の人間関係では、相手とのコミュニケーションを深め、信頼関係を築くためにそうするのですが、ここではむしろマルタを諭すために、やさしく二回声をかけられたのです。そして言われました。『あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っていますね。』。マルタは心配する必要があること心配し、気を使う必要があることに気を使っていました。そこを、主は正面から指摘されたのです。

②どうしても必要なこと (42)「『しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。』」

主は続いて、思い煩っているマルタに「どうしても必要なことはわずかです」と言われました。口語訳では「無くてならないものは多くはない」ですが、人は無くてならないものを見失い、周辺の様々なことに時間も労力もとられてしまいやすいのです。マルタもそのようになっていたのです。主イエスは、「どうしても必要なものは一つだけです。」と言い切られています。そして、マリヤについては彼女の行動を否定することなく、「マリヤはその良い方を選んだのです。」と言われました。マリヤがイエスの話に聞き入っていたことを肯定されたのです。主はさらに明確に、「彼女からそれを取り上げてはいけません。」と言われたのでした。

《結論》

今朝の聖書箇所を読むとよくこのような反応があります。つまり、①マルタが言う事ももっともだ。②マルタが一所懸命に働いているのに、マリヤは手伝おうともしない。③マルタも、イエスのお話をききたいのだ。④マリヤはマルタの手伝いをすべきだ。などとマルタへの同情しきりです。

しかし、この聖書箇所はマルタとマリヤの比較をしているわけではありません。一見、この姉妹の行動を比較して、マルタよりマリヤの方が優れていること教えられていると取りがちなのですが、ここは語られているのは、別の視点であることを学ばなければなりません。

それではどういうことなのでしょう。

マルタをイエスの弟子という観点から考えるとこの聖書箇所の主旨がわかってきます。私たちはイエスの弟子というと、12 弟子や 70 人の弟子達のことを考えます。しかし、ベタニヤ村に住むマルタやマリヤは、そう呼ばれてはいませんが、弟子と言っても良い存在です。そのような面から見ると、ここで主イエスはマルタに対して弟子教育をしていると見ることができます。だとするならば、主がマルタに対して、人情をとらずに、教えを優先していることがうなずけます。主イエスはこの機会を用いて、マルタを霊的に育てようとしているのです。教育の絶好の機会として、用いておられるのです。

それでは、主は何を教えようとしておられるのでしょうか。それは、前段で出てきたテーマとも関連しています。前段では救われる道筋は行ないによるのではなく、主イエスへの信仰こそが優先され、主イエスから学ぶことを通してこそ隣人を愛することが備えられることを学びました。今ここでも、「心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くして、主なる神を愛する」ことが第一であることが教えられているのです。その教材として、目の前にいるマリヤがはからずも主から学ぶことをしていましたので、そこから学ばせようとしているのです。ここでは、「どうしても必要なものはわずかであること」そして、「主を愛しその御言葉から学ぶこと」は、最優先すべきことだと教えられているのです。そのことを弟子マルタに教えようとしてされているのです。

第二にマルタが行っていた熱心なおもてなしの行動はどうだったのかというと、主イエスはこれを決して否定していません。ただ、「多くのことに思い煩い、気を使っている」と指摘されています。彼女が行っていた行動は方向が少し変われば、好ましいことであることを教えようとしています。つまり、コロサイ書 3 章 23 節にこうあります。「何をするにも、人に対してではなく、主に對してするように、心からしなさい」。マルタが主に対してなすという姿勢を貫き、おもてなしの仕事をしていれば、主はそのマルタの働きを大いに評価されたと考えられます。主を第一にすればこそ、おもてなしの働きも豊かに用いられていた筈です。その軸が少しずれたことから、主は彼女を御言葉で教えられたのです。

マルタにとって、この出来事は一生忘れることができなかったでしょう。得難い主からの御言葉を与えられたのはマルタ自身でした。イエスはマリヤとは違った意味で、マルタを特別に愛しておられたのです。だからこそ、彼女を一人の弟子として教育されたのです。

私たちも、マルタのような事態に遭遇することがあるでしょう。人間関係において、苛立つようなこともありましよう。その時には、「何が無くてならないのですか?」「どうしても必要なものは何ですか?」と問われているのです。いつも原点に戻り、主にあって生き、主の御言葉に立つことを第一にしていましよう。そうするときに、私たちの働き、行動が、主に用いられるのです。それら一つ一つが主のために行うことへと導かれるのです。人の事にうずもれず、主を見上げて、御言葉に導かれ歩んでいまいましよう。